日本人の祈りと神頼み行為に関する心理学的考察

谷井　脩一郎

私たちは日常的に祈り、神頼みをしているが、その行為が持つ意味を考えることはほとんどしない。祈り、神頼みは定義上、神的な存在に向けてなされる行為である。キリスト教など、多数派宗教の信者は、聖書に記された唯一無二の存在である神に向かってそれらの行為を行っているが、多神教の世界のなかに生きる日本人は、「神」としてイメージするものが明確ではないし、自らを無宗教と認識している人も多い。本研究は、そうした背景があるにもかかわらず、なぜ私たちはそうした行為を当然のようにしているのか、ひいては、日本人は本当に「神」に向けて祈っているのか、という問いへの答えを模索するものであった。

まず、日本人がどんな行為を祈り、神頼みと称しているのかを整理するため、ブレインストーミングによって様々な祈り、神頼み状況を収集し、分類を試みた。その結果、その全てが嘆願の意味合いを持つものであることが明らかになった。また、KJ 法による分類の結果、それらはさらにコントロール不可能な未来の実現、コントロール可能な未来の実現、過失の取り消しという 3 つの種類に分けられた。

次に、なぜ日本人が祈り、神頼みを行い、また、なぜそれらを有意義な行為だと感じているのかを明らかにするため、行為に関係すると考えられる心理指標を複数選出し、それらによって行動を説明することを試みた。その結果、日本人が日常的に行う多くの祈り、神頼みに関しては、それが宗教行為であるという理解が失われていた。しかしながら、無意識下においては、日本古来の宗教心が行動に影響している可能性が示唆された。また、祈り、神頼み行動に対してより明確な説明力を持っていたのは、「努力には必ず見返りがある」「世界はいつか必ず公平になるようにできている」という信念であった。

これらの結果を通して、日本人の祈り、神頼みに関して様々な考察をすることができた。まず、日本人はほとんどの祈り、神頼みを宗教行動と意識していない理由としては、行動自体が世俗化したということも考えられるし、あらゆる宗教行動が周りの人々の真似をすることで身につけられていくという、日本特有の文化背景も絡んでいると推測される。また、そもそも神道は、神の明確な姿かたちを想定することが不必要であるという性格を持つため、「何に向けて祈っているのか」という問いの答えがそもそも必要ないという、教義自体に起因する問題もあると考えられる。

しかし、無意識下においては、超越的な存在の力を感じ取りながら行動している可能性が示唆されたことにより、それらが信仰と完全に切り離されていることはない。こうした結果を鑑みれば、立てた問いにはっきりとした回答をすることは難しい。

ここにおいて、「神がいるから祈る」のではなく、「祈るために人間が神を創り出した」という学説が、議論の拡がりを与える。この考えでは、祈り、神頼みに説得力を与えるあらゆるもの、今回の結果で言えば究極的公正世界信念が、その人にとっての「神」となり得る。すなわち、すべての祈り、神頼みは「神」に向かうものだと言える。

この説は、日本人の祈り、神頼みが嘆願のみになっているという結果にも説明を与える。先行研究によると、あらゆる祈りのなかで、嘆願の祈りがもっとも原始的な祈りだとされている。すると、キリスト教に見られる感謝や崇拝といった祈りは、聖書の物語に触れ、個人のなかで神の実在感が濃くなるに従い、相互コミュニケーションのマナーとして後から体系化されたものと考えられる。神道は、キリスト教のように「神」に物語を付与することをしなかったために、嘆願の祈りのみになっていると推測できる。

祈り、神頼みはこれまで、宗教性、信仰心の表出であるという前提をもとに研究されてきた。本研究は、そうした前提を取り払い、多角的な視点から行為を捉える必要性を示しているだろう。（社会心理学）